

# 眞生

第九卷 第一號

大正十四年八月十三日  
第三種郵便物認可

昭和四年十二月廿八日印刷  
昭和五年一月十二日發行

（毎月一回十二日發行）第九卷 第一號

- 春が来た、春が来ました。新しき法の光に天も地も蓋はれてゐるのを見ます。限りなき法の光が此の春の光となつて、あらゆる世界を照してゐます。
- あの寒い冬の中からも、もうすぐ春だと云ふことの知らせは、望みに充てる青年の心には限りなき力であります。而もその春が来ました。
- 降りつもる雪の下からも、春の日をあびたあの輝きは、若草の芽生には限りなき望みと喜びと力が感じられます。都も鄙も春を喜ぶ子供的心にはありありと新生の光が見える。
- そしてまた私共の心の中にも、靜に如來の御光を仰げば春の日のそれにもまして、うらくかなあたゝかきミオヤの慈光が心ゆくまゝに輝いてゐるのを見ます。
- 望みと喜びと力の生活は此のみ光りに照されてこそ芽生もすれ、また生長もするのであります。今年こそはと限りなき喜びと望みと力が湧くのを覚えます。
- 若草の春の日にも出るその如く、私共の心の目芽えも限りなき慈悲の光にも出るのを感じます。
- 願くは我が限りなき法の友人よ、此の御光の中に光あれ。（念）

# 新宗教の進路

## 目次

|           |      |
|-----------|------|
| 如來の生      | 尅子   |
| 新宗教の進路    | 尅子   |
| 法然上人と私の信仰 | 土屋觀道 |
| 求人の心得     | 中村辨康 |
| 稱名實感      | 土屋觀道 |
| 吾朋便り      |      |

## 如來の生

神が救ふのではない、佛が救ふのではない。神や佛を信ずることに因つて、自分が本當に「歸命」の態度になつた時、自分の上に一切の功德が現成するのです。天地を動かし、天地が動いてゐる生命の原理が全分自己の上に顯現する。それを如來様から「救はれた。」神様から「御利益」に預つたといふのです。

恰度弓を射る時、先づ的に向つて姿勢を執り、キリ／＼と弦を引き絞リ、エイと射がきまつた刹那に矢を放つ、もうその瞬間矢は的を破つてゐるのです。的に當る中らぬは問題でない、的と自分が一體になり、一體になつた極致から矢を放つ、その矢は天地を射抜いてゐるのです。本當に弓を射るものには「一的」はいらぬ、一的は天地が的である。自分が的になつた時、それが本當の「一的」です。「佛」はいらぬ、佛がいらなくなつた時、それが本當の佛である。そして丈六八尺加何なる「佛」をも本當に拜がめる。「救ひ」はいらぬ、「救ひ」がいらなくなる位に眞に救ひに自分が更生せねばならぬ。

釋尊も初めは「悟り」を探がされた、「救ひ」を求められた。そして自ら「悟り」を體驗せられたとき「悟り」が何處かへ吹き飛んで了つた。そして自分の生活の二々が「悟り」となつて來た。

此の手に「お慈悲」を體驗すること、「他力」を自分生活の内に味ふこと、これが信仰である、これが宗教である、これが如來である。

如來さまは「如」が自己の上に「來現」することである。それをいつまでも遠方に祭つて置いて、ユナラから拜んでゐるだけでは、「如」も自分が絶ち切れてゐる。それで自己への如來ではない、一つの飾物、慰み物である。自分の如來様は自分を活かして下さる方である。自分の裡にそのみかみか惠を現はし給ふ如來様である。それであつてこそ如來の御生命が我生命、我生命が如來の大生命に内面的に連る同体の「生」であります。(尅)

昔は街へ這入つても、村へ這入つても、一番目に附く大きい建物は寺であつた、又チャーチであつた。これは西洋でも、日本でも變りはない。

けれど此頃、市で目に附く一番大きい建物は何か、又一番表通りの良い場所を占めてゐる建物は何か。銀行か、ビルディングか、デパートか、オペラか、ホテルかである。此等は皆大資本の権化で、百万の市民を睥睨しながら、彼等から金を吸ひ上げて益々太つてゆく、そしてなほ大工場や大商館が愈々大規模に築き建て上がつてゆく、そして此等が都市美であり、文化進歩の標準である。其間に挾つて教會とか宗教會館とかいふものが立たせようとしても、漸く二萬圓か三萬圓集めるのに大難事で、建つたところで其佛の見すばらしい事、而かもそれが信仰の溢れから自然に建つたのでなく、無理に「造つた」のであるから教化の實際的能率が上らぬこと夥しい。

其他寺とか説教場とかいふものは悉く市外へ放逐されて行く、そして教家の素質が低下する、信仰の眞情が乏しくなる等、宗教界は衰微し、宗教そのもの、鼎の輕重までが問はれるに至つた。識者は慨嘆する。

然し私はそうとは思はぬ。教會の尖塔や、伽藍の礎は教會から廢滅しても、公會堂や議事堂、齋場の利用だけで十分今の教會や寺院の機能位は補へれる。それよりも各人の家庭を「活きた教會」にすることがより大切である。もう今の世に寺や山門や傳道場を建てることは遅い、宜しく各人の家を「活きた寺」にすべきである。そして此家を以て、此商賣を以て、「活きた傳道」をなすべきである。「お經」を讀んだり、「説教」をしたりして、宗教を弘める時代ではない、自分の「人格」と、「生きた生活」を以て社會の衷心となつて行く可きである。

宗派は滅んでも「法」は永久に亡びない、宗教家が無くも「如來」は永遠に失くならない。法は、そう云ふ過去の型骸を壊滅させて、新しい形式を産んで行くのが本質である。なぜか云へば法は常に「活きて」ゐる、活きてゐるものは一處に停らない、常に變化する。「如來」も活きてゐられる。だから恒に舊い宗教家を殺して、新しい「宗教人」を産み給ふ、即ち法と佛とは其お働さして常に「新しい僧」を創造し給ふ。

我々はその新しい「僧」——「宗教人」にならねばならぬ、其新しい僧の團隊たる僧伽——家庭、社會を造らねばならぬ。近く聞くキリスト教界の「神の國建設運動」も、百萬人の信者の頭数を揃へることではない、此の眞實の「僧伽」を造ることであらねばならぬ。(尅子)



## 法然上人と私の信仰

土 屋 觀 道

□私は法然上人によつて救はれたと云つてもよいのであります。何となれば上人なくしては今日の私は全くないからであります。而て此のことは今も昔と同じであります。寧ろ私の信仰は日を経るに従つて、上人の教へに近づくのみと云つてもよいのであります。

□然ば私の信仰と法然上人の信仰とはどの點がそんなに一致するのでありませう。それは言ふまでもなく、かゝるあさましき私共が如來の本願によつて救はれる點であります。之を昔の言葉で云へば凡夫の報土往生と云ふ點にあります。

□何故か私は死ぬことを好みません。そしてまたどこまでもよくなりたい心が止まぬのであります。かど云つてそれでは私にそれができるかと云ふに何一つ思ふやうにそれができぬのが凡夫たる私であります。

□生きて行かうとするに生きれない、死にたくないのに死なねばならぬ、こんな気持ち、それも親や兄弟の死ならまだ辛抱もできませう、乍然それが自分自身の死と云ふことに至つては全く堪えきれないことでもあります。

□佛教では之を無常觀と云つて居るのでありますが、此の死の發見は實に人生史上の重大な問題であります。

□それにまたよくならうとするのによくなれぬと云ふことも人生の一大苦痛であります。善は爲すべきもの、惡は爲すべからざるもの、それは三つ兒でもよく知るところであります。乍然一体何が本當の善であり、惡であるか。善惡の根本標準が私共には判らぬのであります。

□而もよしそれが判つただけとしまして、私共にはそれが甚だ行にくいものであります。善は爲すべし、惡は爲す可からずと知りながら、ともすればその爲すべき方の善が爲されずして、爲すべからざる方の惡が多いのであります。

□此の罪惡と生死の問題は人類の自覺が段々と發達するにつれて一層明かとなるのであります。人格高き人は此の觀も亦強かに思へるのであります。之は主として、自分の理想が高まると同時にその理想を以つて自らの生活を反省することも多いからであります。之を理想と現實との矛盾とでも云ふべきでせう。而も此の矛盾は實に人生に於ける一つの大きな苦痛であります。

□然ば私共は此の苦痛をいかにして脱すべきであるか、それはたゞ一に此の人生の矛盾を裁斷して矛盾なき理想の生活へ突進する外はないのであります。言かへれば此の現實を理想に近づくべく専心改造するより外にその道はないのであります。

### 二

□乍然或る人は言ふかも知れませんが。僕等にはそんなことなど考へる暇がない。またそんなことなど考へる必要もない。そしてまた、それは僕等にとつてはどうでもよいのだ。僕等はそれよりも先づ生きることが大切だ。而てその生きるとは即ち今日のパンの問題だ、パンなくしては一切の人生がお終いである。人生はパンだ、生きることだ。その外に人生はない。一切の善はパンを得ることだ。一切

の悪はそれを得ぬことだ。パンが人生の標準である。

□乍然それが果して人生であらうか。人はパンのみにして生くるものにあらずとキリストも言いました。パンは山のやうに持つてゐて、それでも人は死ぬのであります。パンなくして人が生きれないと云ふことも事實であるが、それだからと云つてパンを得ることが人生であるとは思えないのであります。

□私共には何せか、人生にはパン以上の世界がありさうに思へてなりません。パンを得ることも大切でありませんが、更に此の肉身を意義あらしめたくてならぬものがあります。

□之をまどむれば此の世の偽悪醜を捨て、眞善美の生活に此の身を投ずることでありませう。苦しみなき生活、望み多き樂しみ望みと、喜びと力の中に此の身の殺さるゝのも厭はぬ生活を云ふのであります。

□佛教では之を菩提心と云つて居ります。或は向上心と云つても差支へない。即ち佛陀の生活であります。

### 三

□然に私共の實際生活はその實、何一つとして思ふやうに行かぬのであります。徒に理想のみは高いのであるが、その實際の生活は反つて之に反するのさへ感ずるのであります。尤も此の中には私共が理想としておるその理想さへ間違つて居るものもありませう。又さうでないにしても、それは單なる一人の努力では急にごうすることもできないものもあります。

□また、自分の力が足りない爲めに、それを行はうとしても行ふことのできぬものもあるに違ひありません。それが個人と社會との關係に於て一層甚しいのを感じるのであります。

□だから、佛教では先づ此の社會がいかなるものかを如實に見るのであります。そして、その上で私

共が之に對してごうすればよいかを示さうと生るのであります。而もその第一の順序としては、世間の此の世に對する誤解から訂正して、更に之に對していかに生くべきかを示すのが佛教の教へであります。

□その第一の教へが諸行無常の教へであります。之は世間の人々が多く氣づかない所でありまして、此の世を常住なところ、不死の世界だと思つてゐる人が多いのであります。然に此の世は決して世界の人の考へてゐるやうな常住な所でもなく、亦永遠に死なないやうなところでもなく、一として常住なものもなく、一として不死なものではないと教ゆるのがその教へであります。

□即ち人生の有限と此の世の無常とを示すものでありまして、此の世は私共の思つてゐる樂しい所の世界でもなく、また眞心の集りの世界でもないと云ふことを教へるのであります。常住と思つてゐる世界は常に變化し、永遠に生かれるかに思つてゐる人生は夢のやうに過ぎて行く有限の一生であります。而もその人々の心は誠を求めて誠ならず、甚だ偽りと、醜さと、罪惡の心に充たされた生活が多いことをありのまゝに示さうとしたのであります。

□第二は諸法無我の教へであります。世間の人々は多くの場合、自分と云ふものに捕はれて、おれがおれがと云ふ氣持がとれないのであります。之を我執と云いますが、之を今日の言葉で云へば、自分と云ふものが他と獨立して個在してゐると思ふ觀念であります。言換へれば萬法の中に縁起してゐる自分を知らないで、たゞ表面に表はれた我他彼此の見解に立つた有我の考へであります。然に佛教では萬法一如の當体から之を望めて、此の誤つた見解を打破しやうとしたのが諸法無我の教へであります。

□之は私共が死にたくない、よくなりたいのにかゝわらず、何故にそれができないかと云ふ點から考へて、此の世を考へて見ますとき初めて此の説が明かとなつて來るのであつて、それはひとへに私共

が此の世間の無常を知らず、またこの諸法の無我を知らないから起つて來ると云ふことになるのであります。

□だから、こゝに眞實の自由を得、眞に人生の解脱を欲するならば、之等の世間の誤つた考へを悉く打破して其の考へを宇宙の眞相から出發をして立たねばならぬとするのが、涅槃寂靜の第三の教へであります。それは即ち悟りの世界であります。

□此の迷いの生活から悟りの生活に至るの教へが佛教の教へであります。而て釋尊は其の体達者でありました。之を佛陀と云ふのであります。

## 四

□ところが實際の生活に於て、私共の生活はさうたやすく佛の教へのやうになり切れぬのであります。言かへれば、私共の生活が仲々思ふやうにならぬのであります。茲に於て、どうしたならば釋尊のやうに悟りが開くことができるのかと云ふことが問題となりました。其の結果として、今日の色々の宗旨や宗派が現はれて來たのであります。

□中には時代の影響や、民族の相違によつて、色々の佛説でないやうなものも混つて來た傾向もあります。乍然その佛教の根本精神に至つては、益々發達して來たと見るのが今日の佛教の見方でありま

す。

□處で、之を大別しますれば、自力門と他力門との二つになります。自力門とは佛の教へによつて自分の力で自ら修行して悟りを開くと云ふ方面であり、他力門とは自分の力ではそれがとてもできぬと云ふので、如來の本願力に信頼して、淨土に生ると云ふ教へであります。前者を亦聖道門といひ、後者を淨土門とも云ふのであります。

□佛教の教へはごこまでは最後には自ら悟りを開いて佛となると云ふのがその究極であります。乍然そこに行くまでに自分の力で之を達することのできぬ場合、如來の御力によつて悟りを開かうとするこども亦決して誤まつた考へではないのであります。

□乍然それは暫く別として、聖道門では自ら悟りを開いて佛となり、淨土門では佛の救いをかりて淨土に往生を乞はれて悟りを開くと云ふのが一般の教へであります。だから聖淨二門の相違いは全くその方法の相違に外ならぬのであります。

□然ば聖淨の二門に於て、その方法は何であるかと云へば、聖道門では戒、定、慧の三學を修することによつて解脱を得られ、淨土門にあつては、念佛することによつて往生が出來ると云ふのであります。

□ところが、戒、定、慧の三學と云ふものは釋尊を去ることが遠くなるにつれて、その意味が段々ハツキリしない上に、之を修することがとても普通の人にはできないのであります。之に反して、念佛はいかなる人でも彌陀の本願を信じて之を稱へれば往生が出來ると云ふのがその教へでありました。

□法然上人が自ら自力の法門を捨て、淨土の一門に歸依せられたのも、全くこゝにあつたのであります。自分の力で全力を盡してもどうしてもそれが得られないものが、一切のそれらを捨て、如來の大慈に合掌すると云ふことは之をやつた人でなくては判らないところでありました。

## 五

□このことを詳しく説いたのは大無量壽經であります。支那の善導大師は觀無量壽經の疏の中に如來の大慈本願のいはれを詳しく説かれたのであります。我が宗祖法然上人が念佛の信仰には入られたのも全く之が爲めでありました。

□理想と現實との矛盾、言かへれば私共の生活の悩みであります。理想高きにかゝわらず、實行の之に伴はぬ自分の不甲斐なさであります。それが法然上人の限りなき悩みでありました。

□然に、そこをそのままに救はうとするのが彌陀の本願でありました。智者も愚者も問ふところでない。善人も悪人も差支へぬと云ふのが淨土教の教へであります。それどころか、智者はよいが愚者はだめだ、善人はよいが悪人は入れぬと云ふのが聖道門の教へでありますのに、善人よりも悪人、智者よりも愚者の方が棄られぬと云ふのが淨土教の救いでありました。

□それは智者や善人の方はそのままにしておいても段々とよくなつて、いつかは解脱を得るの時もあるが、愚者や悪人はそれが無いからであります。

□彼の眞宗の開祖親鸞上人が自分の身のあさましいことを『地獄一定住みかぞかし』と云つて歡げられるかたわら『彌陀の本願よくよく案ずれば親鸞一人が爲めなりけり』と喜ばれたのもこれでありませぬ。又『善人なほもて往生を遂ぐいかに況んや悪人をや』と叫ばれたのも全く此の佛の大悲から割出された言葉でありました。

□だから、その師法然上人が『十惡の法然房五逆の法然房がたゞ念佛して往生はするなり』と念佛の一行に歸せられたのも全く理由なきことではありません。

□此の意味に於て、實に淨土教は一切の諸佛も見放したやうなものまでも救はうとするのがその心へであります。否、それよりも寧ろ諸佛の見捨てたところの悪人や愚人を救ふべく現はれたのが彌陀の本願であつたのであります。

□而も、一切の衆生を救ふと云ふことが果して諸佛の大悲であるならば、阿彌陀佛の此の大悲こそ、眞に諸佛大悲の結晶とこそ云ふべきであります。

□而て、私が彌陀の本願に歸依するやうになつたのも全く此の一點の教にありました。

—二九・二一・一八—

## 求道人のこゝろ得

中 村 辨 康

御釋迦様が摩竭提の伽耶の菩提樹の下で御年三十の二月八日、永い永い瞑想から眞實なる悟に目醒められたのちの二七日、毎朝々々黎明の空が赤々と朝日に輝

き、鳥も草も樹も川も水も空氣も遠くの景色も、一切が炳然として、明らかに朗然として清らかに本當に生き生きと甦がへつたかの如く見えるのであります。

明るい覺明の朝です。地球に其覺明の光りが輝いた、其頃の或朝の出來事です。

御釋迦様は「道」其物と合して天地其物になり切つて居られます。

「默々」唯だ默々として海印炳現三昧の中に照々靈々たる心境で居らせられます。

しかも、其天地の中には雲と集つた諸菩薩や、諸天諸神なき悉く口を極めて佛華嚴の境界を讚歎し、更らに如来の身心の勝妙言語に絶せる有様を讚歎したのち、其甚深の眞理に就て問答をし合ふのであります。

然し釋尊は默々として御さりの御心を天地一杯に満

たし「眞理」其物になり切つて唯だ聞いて居られるのみであります。

やがて智首菩薩が文殊師利菩薩に問はれました。

「佛子よ。私達求道者は日常の生活をどんなに調べて行つたらよいでせうか。而して色々な勝れた智慧を得て社會の多くの人々の爲めに依り處となり救ひとなり光りとなり導きとなり輝きとなつて行きたいものですが、どうしたらよいでせうか」

文殊菩薩が答へられました。

「では日常生活の心得を御話しませう。私達に觸れ行く一切の事々物々を悉く師とし反省材料とし、求道の糧として行くのがよいのです。まあ其概略を御參考迄に申上げて見ませう。私達が若し美しい莊身具をつける事があるにせませうか、さうした場合には偽りの飾を捨てて眞實の者にならうと思ふ可きであります。若しまた樓閣に登つた時は一切の人達と共に眞理を窮めて一切を徹見しやうと思ひたいです。若し災難にあつたら今までは力及ばずして小さな災難に困まつて居るけれども意に随つて自由自在に無碍の境に至りたいものだと思つたいです。

す。又た着物を脱ぐ場合もろもろの罪を脱がうと思ひ、理髪する時は煩惱を断除しやうと思ひ、敷物を敷く時は善法を敷かふと思ひ、端坐する時は菩提の坐に坐さうと思ひ、足を下す時は聖跡を履まうと思ひ、足を擧げる時は生死の海を出やうと思ひ、着物を着る時は色々の善い事を心に着やうと思ひ、大小便をする時は一切の汚れ、醜くさ、罪とがを捨てやうと思ひ、大小便をすませて手を洗ふ時は悪い處からはサツサと去らふと思ひ、水で手を洗はば清い手で眞理を受け持たうと思ひ、顔を洗ふ時は垢のないものにならうと思ひ、道を行く時は早く菩提に趣き淨法界を履んで佛道を成就しやうと念願し、高き坂を上る時は三界を超出しやうと思ひ、坂を下る時は謙虚な氣持で高ぶらないやうにと反省し、曲つた道を行く時は不正の行爲をしまひ誓ひ、眞直な道を見ては心を正直にして諂ひや誑を爲まひと願ひ、路に塵なきを見ては我が心もまた潤澤ならんと思ひ、高山を見ては無上の道を志ざして頂きを見ない様にしたいと思ひ、葉の茂つた樹を見ては私も一切の爲めに蔭になつて行きたいと思ひ、大きな河を見ては眞理の流に預つて覺醒智の大海に入らうと思ひ、井戸水を汲む時は汲めども盡きない辯才智を得たいものだと思ひ、若し橋を見れば私も一切を渡してやりたと思ひ、畑をたがやす人を見れば五欲の

愛草を切り捨てたいと思ひ、着飾つて居る人を見ては如來の三十二相を想ひ、粗服の人を見ては簡易生活をしたいものだと考へ、苦しみ多き人を見ては早く根本智を得て一切の苦をなくして上げたいものだと悲しみ、無病の人を見れば金剛のからだとなつて老い衰へる事のないやうにしたいと念じ、修行者を見ては靜かに意を調べて眞の清淨を得やうと思ひ、操行の人を見ては精神努力志行堅固の者とならうと思ひ、武士を見ては眞理の鎧を着たい者だと思ひ、城を見れば至誠を以て心に屈する所なき者とならうと思ひ、他家の門に入る時は眞理の門に入らうと思ひ、飯びつが空になつて居たら心清淨にして一切は執着なき空だと思ひ、御馳走を食べる時は如來大悲の薫ずる處、願満足するとも執着しまひと思ひ、洗湯にはいる時は身にも心にも垢をつけないやう内外光潔を得たいものだと思ひ、夏の暑い時には煩惱の熱を離れて清涼の心を得たいと思ひ、冬の寒い時には氷の様にとづる事なく早く解脱したいものだと思ひ、如來を見奉らば佛の如き無碍の眼を得て一切の佛、一切の最勝なるものを見たいものだと思ひ、夜寝る時は身には安穩を得、心には動亂なき様にと祈り、朝起きては一切を覺醒して廣く十方を顧みたいと願ふ可きであります。

こんな事を一一申上げると切りも際限もありません

が、先づ大体こんな風な風心を用ひますれば、天や魔や梵や沙門や婆羅門や乾闥婆や阿脩羅や聲聞や緣覺などの到底動かす事の出来ない大人格の人となり得るでせう。かくて菩薩方は互に問者となり答者となつて尙ほも問答をつゞけられるのであります。(以上)

りますが、其文殊の指南に依つた求道の歷程を思ひましても南と求道心との關係がかなり深い味ひとして私達に感ぜられる者があると思ひます。また午は馬に通じて進展を意味します。もし私達求道者が新らしき昭和五年に於て何等かの進展を見せ無つたら私達の信仰は寧ろ死んで居ると云つてもいいでせう。阿彌陀佛の御本願が一切を攝取し盡さんとして居られる。其向上進展の道を學び行く念佛信者が十年一日の如く其處に何等の具体的な力をも見せなかつたら夫は畢竟「しいな念佛」に過ぎません。

委しくは國譯一切經第五回配本一九八頁から二〇六頁の間を御覽下さい。また八十華嚴と六十華嚴と多少の開合がありますから参照したい方は國譯大藏經をも御覽下さい。

さうぞ本年こそは本當に生きる道をハツキリと究明し合ふて行きたいものです。本當に御願ひして置きます。

辨榮上人の御命日に當りて

東京 小栗利吉

別れては愛慕の念を止みがたし

うつろへたまへ我等師の君

土屋 觀道

夢うつ、忘る暇なき法の師の

今日は逝きにじ日にそありける

土屋 美和子

とにかく此の淨行品を拜見いたしますと誠に之は驚く可き心境であります、私達求道者に取つてこの位參考になるか分りませんと思ひます。かうした氣持で一切を師として行つたら何にも云ふ處はありません。色々なくだくだしい事を云ふよりも是に超した最善な修養心理はないからであります。

逝きましてなかの年月へぬることも

ゆめにうつ、に忘る間をなき

ことに今年は午年です。午は南を指します南はあたゝかであり明らかであつて、梅の花なども南枝からボツボツふくらみかける位であります。

しかも此華嚴經の終りには善財童子の求道譚が出て居

# 稱名實感

土屋觀道

一一一

## 一、稱名念佛

念佛は申すに限りません。念佛もしない人に念佛の味が判らうはずがありません。之を冷暖自知と云います。食物が食べなくては其の味が判らぬやうに、念佛も念佛さねば判るものではありません。

## 二、理窟はいらぬ

念佛には理窟はいりません。たゞ申せば生れるところに本當の救いがあるのです。理窟を言ふのはまだそれだけ本當の念佛が判らぬからです。

## 三、理窟以上の念佛

理窟はよくても實行のできぬものには仕やうがありません。念佛は理窟以上の事實であります。理窟だけではいかぬから念佛するのです。念佛は理窟以上の事實であります。

## 四、念佛がたらぬ

私には、さうしても信仰が得られぬと云ふ人があります。

す。けれどもそれは念佛をせないからです。私は念佛がたらぬからだと申したい。

## 五、念佛は体験

念佛は体験の世界であります。聞いただけでは体験になりません。如來に南無することが大切であります。

## 六、先づ念佛

自分の力でさうもならぬと云ふものをそのまま救ふと云ふのが念佛です。此の点が判きりすれば先づ念佛です。

## 七、疑心は闇鬼

古來、疑心闇鬼を生ずと申します。如來の本願も疑へばはてがありません。衆生を救ふのが佛の大悲と心得て念佛は正直に申すことです。

## 八、善知識

何事でも獨りできぬことはあまりよいことではありません。心のゆくまで先學の教へを待つことです。

## 九、攝取の中

念佛する人は己に光明裡中の人であります。否、己に念佛することそれ自身が光明攝取の中であります。

## 一〇、夜と晝

念佛以前と以後との境は恰も夜と晝との如くであります。闇夜に燈火と云つてもよいのです。

## 一一、夜あけの心地

念佛の生活は夜あけの心地と云つてもよいのです。闇黒の中からも夜あけを待つ心の念佛はすべきです。光は佛の方よりさしてまゐります。

## 一二、念佛と信仰

念佛と信仰とは別ではありません。念佛することがそのまま念佛の信仰であります。念佛を外にして念佛の信仰はありません。

## 一三、念佛と生活

念佛と生活とも亦同じであります。生活を離れた念佛もなければ念佛を離れた生活もありません。生活の中か

ら念佛し、念佛の中から生活するのが信仰であります。

## 一四、念佛が進めば

念佛が進めば生活も進みます。念佛が深まれば生活も深まります。

## 一五、念佛と靈化

念佛の進みは靈化の進みです。靈化の進みは生活の進みと云ふべきです。念佛なくして靈化はあり得ないが、靈化なくして生活もあり得ないのが信仰です。

## 一六、どこまで進むか

それでは念佛はどこまで進む可きであります。それは解脱を得るまでです。佛となるまでです。佛としての生活のできるところまでと申しておきます。

## 一七、佛心大慈悲

佛心とは大慈悲と申します。佛となるとは慈悲の佛となることです。佛としての生活は慈悲の生活としての佛と云ふことです。

(二九、一一、一九、一一〇)

# 吾朋便り

□東京 土屋親道

あげましておめでさう。謹んで道友の御健勝を御祈り申します。思へば昨年一年も夢のやうに暮れました。乍然私にはその一年が可なり色々なことを教へたのを感謝してゐます。定めし皆さんへも色々なことがあつたことであらう。

□ところで、今年はまだこんなことがありませう。靜に思へば之も亦新しい経験として楽しいことです。私の家庭では三人の子供が大きくなるのが待ち遠しくて従つて出来た子供も遅いのです。こゝ、四五年でも早く過ればと思ふことさへないではありませぬ。或は十年でも一時に來ればと思ふことさへあります。

□それは子供が小さいからです。子供のこゝろなんか如來様に任かせておけば云ふ點もありません。けれどもまたさうばか

□津嶋 中野善英様

（前畧） 世間が不景氣と共に信仰の方にも各地とも少々の不景氣風が見舞てゐるやうで、うら淋しく感じますが、一段落終つて、第二段に移る前提だと思ひます。いつまでも同一感銘で感激を續けようとするところが無理で、舊い世界から藻脱けて新しい世界へ肥立つてゆくべきだと思ひます。その肥立つて行く可き世界が見えないで舊い世界にもあきたくさす二の足をふんでゐる形であるかと思ひます。また第一の世界へ近附きつゝある人や處は活氣があるが第一の世界は十分に成長しうせた人や處は非常な停滞や休養状態が現はれてゐるやうに思ひます。

私自身にもモツミグン／＼底を衝いて流れて行きたいさ常に念じてゐます。それでゐて余りに變りの鈍いのに齒がゆく御座います。それには矢張り良い刺戟と眞剣な御念佛が足らぬからと思ひます。

（略）

相互の氣分が淀滞したり 又處ざして

り云つて居れないところもあります。そこが親馬鹿と云ふところかも知れませぬ。けれども私共はそこが親心だと思ひて感心してゐます。

□親煩悩に子畜生と申しましたが、子の畜生は暫く別として、之が親の煩悩ならば御佛の御慈悲もそれだから有難いと思ひます。如來の大慈悲は救はずにはおれぬと云ふ此の子を思ふ親の心と知らして頂きます。

□念佛申されば救はぬと云ふやうな佛ではありませぬ。乍然念佛申すところにその光が得られるのが衆生から見た佛でありませう。子供が親を慕ふ心がそのまま佛に對する私共の念佛の心と知りまじた。

□それにつけても、念佛はするに限りません。あまりに理窟ばかりこれると理窟たはれして念佛が留守になります。念佛が留守になるを自然に佛を離れます。佛を離れた自分の心はいつしか我ま、な心になります。我ま、な心は何につけかにつけあさましき事のみが多いのです。そこま、ならぬ私共の生活があります。心

氣分がハキツカぬのは新しい分子が加はらぬからだと思ひます。常に混血し常に澤山の眞流が合流して行くを活氣を呈し、渦巻きを造つて行きますが、從來の思想信念だけ、從來の人々だけだと思ふといつ顔を合しても張り合もなく氣も引き立たぬといふやうな點が多いやうに思ひます。だから常に新鮮な分子を糾合して行くといふ事が他の爲めより團隊の爲めより、第一自分の爲めであるように思ひます。

そういふ意味から目立つて活氣づいて來たのは岐阜でありませぬ。色々な方面へ引懸りが伸びて行つて漸く再度の噴火をソロ／＼初めかけた。休火山のやうな氣もします。大石は十二月から六七回會集日や合集所が出来て大變な元氣ですが、谷口様方の骨折りと共にお上人の御話が今になつて皆様へ思出されて來たのだらうと思ひます。

（略）

私の所も××階級でなくて働く人々の寄り付きがだん／＼多くなりました。行儀は悪いが皆打ち融けた愉快な集りが出來ます。昔の御別時の爲めの御別時主義

一四

もすさみませぬ。仕事も自然と怠るるので

□之に反して念佛すれば初めはうさくても、いつしか如來に合掌する心になれます。佛に合掌するさきの心ほど清い心はありませぬ。此の清い心が自然と私共の心を清めます。如來を前にして念佛するころ、それがやがて如來を離れぬ心でありませぬ。如來さへ離れれば心はいつも如來のみとあるの心知がします。思ふこととすることも如來を離れぬ心であれば一切はその中から淨化せられて來るのであります。

□だから念佛は申すに限りませぬ。一切の理窟を止めて、とにかく念佛は申すことです。

□道友の中には念佛す人もありませう、申さぬ人もありませう。乍然申したとき心と申さぬ時の心と、ごちらが本當であるかは念佛申したところのある人にして初めて知られることでありませぬ。

□今年は昨年にも劣らず更に一層の念佛をいたしませう。

もだん／＼意味が更つてゆくものでせうか。云々

（畧）

□越后 原吉郎様

御法体益御健勝にて日夜御勉學遊され御興極め御子様方にも御無事にあらせられ候趣き洵に欣喜の至り不堪候。當地道友各位何れも無別條眞光寺之例會に相集り精進致居り拙家一同も變りなく慈光裡中に業務勉勵罷在候間乍憚御放棄被下成度候。來春二月中旬頃約一週間甚だ雪中御迷惑之御義に候へ共當地御傳道御巡錫の程今より御願申上候。道友一同鶴首して御待申上候。

□岐阜 一行基寺様

一年を回顧すれば轉々漸愧あるのみ。道のために盡せし一年の三分の一に満たず、常々上人の御指導をうけ人生の意義に生くるべく心はやられども力足らざるため死の生活のみ多く一層の修養を要すること、存候。先回も一寸御内願申上しが明年春の大別時いろいろの都合にて三月二十五日より三十一日迄七日間に願度御快諾之御報祈念申上候。云々



# 謹奉賀新年

眞生社編輯同人

土屋 觀道 中野 善英 神谷 學周  
 中村 辨康 大橋 俊高 土屋 美和子  
 山口 常照 大野 顯道 百々 治之助

## 伊勢大石別時念佛三昧會御案内

時 昭和五年一月五日より七日まで

所 三重縣飯南郡大石村不動院

參宮線松坂驛にて松坂鐵道に乘換へ終点大石驛にて下車、  
 約五丁、自動車の便あり。

導師 中野 善英 師

各地先輩の御來會を伏て懇願いたします。

主 催 眞生同盟大石支部

### 誌代拂込者御芳名

○壹圓 東京山田はな様、愛知水谷みき様、兵庫渡部しげ様、柏崎小池ゆき様、原長一郎様  
 小熊綱一郎様、吉岡莊吉様。 ○貳圓 長岡中村禪定様、岐阜石川良舟様。 ○參圓 柏崎渡  
 邊八右衛門様、神奈川笹本戒淨上人様、大阪水森島治郎様、佐世保富田とし様。

山十四

#### 本誌定價

一部 金十錢 郵稅共  
 半年 金六十錢 全  
 一ヶ年 金一圓 全

#### 註文の注意

●購讀希望者は代金を添へて御申込下さい  
 ◎誌代は總て前金御拂込の事  
 ◎送金は振替によるのが便利  
 です

昭和四年十二月十二日印刷納本

昭和五年一月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼編輯人 土屋 觀道

名古屋市四區隅 治之助

印刷人 二九三番

名古屋市東區鍋屋町二丁目

印刷所 山田活版印刷所

電話東(4)三六・三五

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番